

情報を批判的に読み取る力をつけるための教育に関する一考察 ークリティカルシンキングの授業実践例ー

The Positive Effect of the Educational Approach for the Media Competency -Practice to Critical Thinking-

立野 貴之^{*1}, 若山 昇^{*2}
Takashi TACHINO^{*1}, Noboru WAKAYAMA^{*2}

^{*1}岡山県立大学

^{*1}Okayama Prefectural University

^{*2}帝京大学

^{*2}Teikyo University

Email: takashi@booh.net

あらまし：最近の大学生は、文章を読むときに批判的な姿勢や論理的思考をあまり働かせることが苦手なように感じる。インターネットが普及し、発信されるメディア情報の質にばらつきが存在するにも関わらず、多くの大学生はメディアが正確であるという認識を持つ傾向にある。本稿では、クリティカルシンキングの授業において、インターネット上の情報を用いて批判的思考態度を育成する実践に関して報告する。授業後にアンケート結果からの評価によると、多くの学生がインターネット上の情報に対して吟味する姿勢を身に付けることができたと考えられる。一方で、誤った情報に対しても「間違いをあえて指摘しない大人の対応」をとる学生もいた。

キーワード：授業実践、クリティカルシンキング、批判的思考、大学講義

1. はじめに

最近の大学生は、身近にある ICT 機器を利用することにより学生生活の様々な活動が制限なく行える環境になった。一方で、それに対応した意識や姿勢が十分に備わっていないように思える。多くの学生が、携帯機器などを利用し、手軽にインターネットの情報を手に入れ、疑いもなく利用をする。今回、授業に参加をした学生の意識では、多くの学生が、新聞記事などをじっくりと読んでいないと回答した(図 1)。

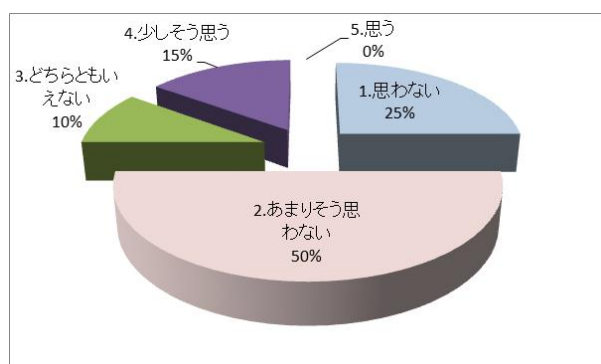


図 1 文章をじっくり読む学生

こういった現状を踏まえ、大学は発想を変えて、批判的な思考を育むような教育を行なうことが必要とされている。本稿で取り上げるクリティカルシンキングは、将来社会に出てから必要な資質能力の向上を真に図っていくことができると考えている。そして、この指導が批判的思考を学ぶための実践的指

導と考え、この指導の振り返りや学生の意識及び自己評価等に基づきながら考察を進める。

2. 研究目的

過去の研究(若山 2009)によれば、クリティカルシンキングに対する志向性が、授業を通じて向上するという結果が出ており、クリティカルシンキングの授業を全く受けない統制群においては、クリティカルシンキングに対する志向性の伸びが、授業を受けた群の伸びよりも小さいことが報告されている。さらに、文献 2(若山 2011)によると、期間を学習期間が半期という短期間の場合でも、受講の有無により、クリティカルシンキングに対する意識に有意な差と交互作用がみられ、クリティカルシンキングの演習授業の有用性を示している。

本研究の目的は、情報処理科目において、インターネット上に溢れる情報に対する批判的な思考を育成するための指導法の一考察をするものである。実践した授業では、実際の授業において、実在するサイトの情報を利用して、効果を検証した。本研究で考案した方法論は、大学生の身近な内容を利用することによって、批判的思考力の育成だけでなく、クリティカルシンキングに対し興味を引くことができたと考えられる。

3. 授業実践

授業では、2 種類の記事を学生に読ませ、それぞれの授業で、アンケート調査をした。

3.1 授業の目的

クリティカルシンキングの授業に関する特徴として、下記の3つを目的とした。

1. 情報や意見をそのまま鵜呑みにせず論理的に考えてみる
2. 物事を多角的・多面的に捉えて多様な可能性を考える
3. 考え方が偏ったものではないかを常に意識すること

また、今回の実践例は1コマ90分の授業の半分程度を利用し、情報処理科目の中で、インターネット上に存在する情報に対して依存度の高い学生が、疑問を持ち、批判的かつ論理的に考えるきっかけとなることを目的としている。

3.2 手順

授業は、実在する嘘ネタの新聞記事を2種類配布し、内容を読んだ学生が、その嘘ネタの記事に関して、どのように理解をするかを調査した。手順は以下のとおりである。

- ① 実在する嘘ネタの新聞記事を配布
- ② 記事を熟読
- ③ 告知前調査
- ④ 嘘ネタの記事であることを告知
- ⑤ 告知後調査

4. 調査結果

調査は授業を受講した情報処理科目の授業を受講した2年生から4年生67名(男:39名,女:28名)が回答し、偽の新聞記事であることを告知する前と、告知した後に質問をした(表1)

表1 質問内容

告知前	Q1	この記事の内容からどのようなことが見えますか？
	Q2	この記事にタイトルを付けてください。
	Q3	この記事から学べることは何かありましたか？
告知後	Q1	あなたは新聞記事をじっくり読みましたか？
	Q2	記事内容を読んで疑問を感じましたか？
	Q3	ネット上の情報を見直すきっかけとなりましたか？

上記の質問から、学生が偽の新聞記事を読んで、これは偽の記事であることに気付いたかどうかを、告知前の学生の記述から判定をした(図2)。

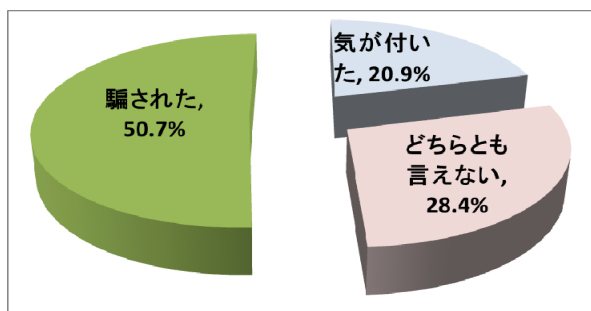


図2 告知前調査からの学生の意識判定

完全に記事が偽物であると分かった学生は、2割程度にとどまり、半数以上がこの新聞記事を読んで、偽の新聞記事であることに気付かなかった。また、記述内容から、どちらとも取れないと判断されるものもあった。これは、学生が「分かっていたけどあえて指摘をしなかった」「授業で配られたプリントなので怪しいとは思ったが…」のように、考えたことが読み取れ、「間違いをあえて指摘しない大人の対応」を取った推測されるものである。

告知後に関しては、5段階(1.そう思わない～5.そう思う)の回答を求めた。調査結果を表2に示す。

表2 調査結果

回答	Q1	Q2	Q3
そう思わない	4.48%	1.49%	5.97%
あまりそう思わない	8.96%	11.94%	13.43%
どちらともいえない	16.42%	5.97%	11.94%
少しそう思う	28.36%	31.34%	49.25%
そう思う	41.79%	49.25%	19.40%

告知後の結果を見ると、注意を促したにも関わらず、新聞記事を読んでいない学生が半数程度いることが分かる。一方で、記事を読んである程度疑問に感じた学生が多かった。告知前の記述からの評価と、告知後の調査を見ると、偽の記事とまでは考えなかったものの、2種類の偽記事を読むことで、新聞記事に対して疑いを持った可能性があることが分かる。

5. 考察

インターネットを利用することで有益な情報を手軽に入手できる反面、有害な情報もたくさん存在する。スマートフォンや携帯電話を頼りにする大学生はこの多岐に渡る情報を、どのように取捨選択するかを学ぶ必要がある。しかし、高校や大学の情報科目における教育で、一通りの知識は与えられるものの、批判的にネット上の情報を読み解くという力は、身に付いていないことがわかる。最近、取り上げられる問題の一つとして、大学生が考えなくなってきている実態がある。情報化社会では、様々な情報源があり、単純に情報を受け取るだけでなく、よく情報を吟味する力が必要となる。つまり、大学教育においても、授業内容の発想を変え、批判的思考、クリティカルシンキングを伸ばすような教育を進めていく必要があるだろう。

参考文献

- (1) 若山昇: “大学におけるクリティカルシンキング演習授業の効果 -クリティカルシンキングに対する志向性と認知欲求の変化から-”, 大学教育学会, Vol.31, No.1, pp.145-153 (2009)
- (2) 若山昇: “大学におけるクリティカルシンキング演習授業の効果(2)-受講の有無, 卒業後の目標の有無からの分析-”, 帝京大学法学会, Vol.27, No.1, pp.35-50 (2011)